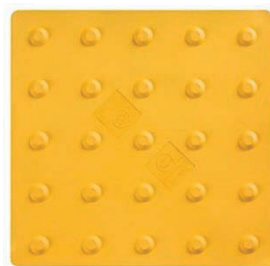


幸せの黄色い道 — 三宅精一 —

みやけせいいち



♪ 足元あしもとを見てごらん 黄色い道しるべ

あなたの歩み てらす

あいをつなぐ 点と線 ♪

これは点字ブロックの歌です。点字ブロックとは、道路にある黄色いでこぼこした道のことです。じつはこの点字ブロックは岡山県の三宅精一さんによって発明はつめいされたのです。

三宅精一さんは、せんそうの終わりごろ、倉敷市くらしきで生まれました。ものがなく、みんなが苦しい生活を送っていた時代でした。そんなときに生まれた三宅さんは、子どものころから家族を大事にするやさしい人でした。おとなになると、多くの人によるこんでもらいたいという思いで、生活の役に立つ発明をたくさんしました。



三宅精一

安全交通試験研究
センター提供

あるとき、三宅^{みやけ}さんは病気で目が見えなくなりそうになっていた岩橋^{いわはし}さんに出会いました。二人ともセントバーナードという大きな犬が大すきで、あっという間になかよくなりました。三宅^{みやけ}さんは、岩橋^{いわはし}さんとの話の中で、目が見えなくなっていくことで大きくなっていく不安^{ふあん}な気持ちや、目の不自由^{ふじゆう}な人にとって足の感覚^{かく}がとても大切であること、耳が目のかわりになることなどを聞きました。岩橋^{いわはし}さんの話の一つ一つうなずきながら聞くうちに、この人のために、また世界中の目の不自由な人のために自分にできることはないかと考えはじめました。

ある日、三宅^{みやけ}さんは目をつぶって道路のそばに立ち、もし自分の目が不自由だったらどうだろうと考えていました。目をつぶっていると、前をよこぎる自動車の速さがいつもよりおそろしく感じられました。自分の立っているところがどこなのか、きけんなどところと安全なところはどこなのか、さっぱり分からなくて、不安な気持ちが大きくなっていききました。

そのとき、大きなクラクションの音がひびきました。目の前にいた、白いつえを持



イラスト 森 邦生氏 提供

った目の不自由な人がすぐ前の道路をわたろうとしたところ、走ってきたタクシーがぶつかりそうになり、あわててクラクションをならしたのでした。目の不自由な人はこわくてその場にうずくまっていました。三宅さん^{みやけ}も、それを見ていておそろしくなりました。

目の不自由な人もひとりで自由に歩けるようにはできないだろうか。三宅さんは考えつづけました。岩橋さんにもたくさん話を聞きました。そして、岩橋さんの「目の見えない人は、こけと土とのさかいでも、くつをはいたままで分かる。」という話を聞き、（これだっ。）と、思いました。

「歩道と車道のさかいを、足のうらを通して分かるようにすればいいんだ。」

こうして世界ではじめての点字ブロックは、三宅さんによって誕生^{たん}し、盲学校^{もう}の近くの岡山市中区原尾島^{はらおしま}のおうだん歩道にせっちされました。

はじめての点字ブロックが誕生してから、三宅さんは点字ブロックを日本中の道路

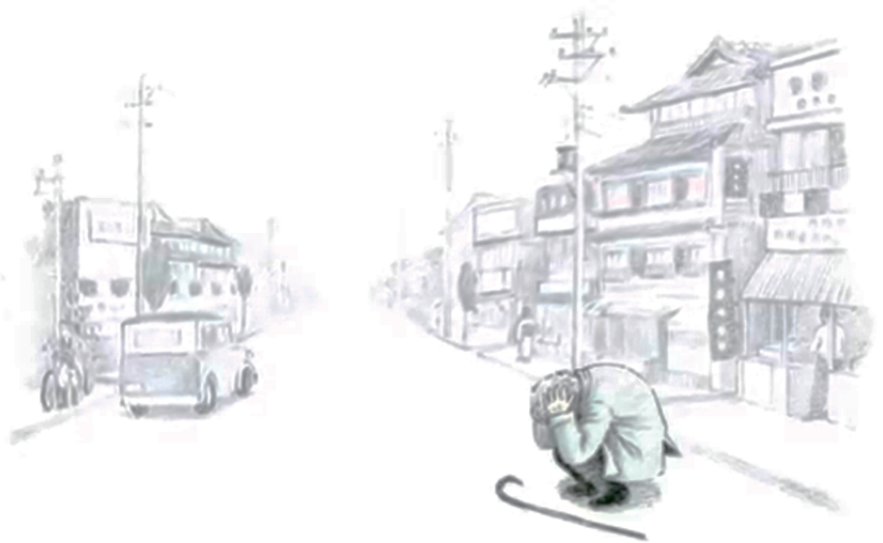


イラスト 森 邦生氏 提供

に広げていくよう、たくさんの方をたずね、せっちしてもらえるようにはたらきかけました。そして、目の不自由な人もひとりで自由に歩けるようにしたいという三宅さんのあつい思いがたわり、点字ブロックはだんだんと日本中に広まっていきました。

今では点字ブロックのよさは、日本だけでなく世界中につたわり始め、「幸せの黄色い道」は、今、世界の国々へと広がりつつあります。

※点字ブロックの歌詞

CD「幸せの黄色い道 点字ブロック発祥の地 岡山」(製作 点字ブロック
発祥の地モニュメント設置実行委員会)より一部抜粋



点字ブロック発祥の地モニュメント(平成22年3月18日建立)

安全交通試験研究センター提供

蒜山だいこん ひるぜん



たかしの家は、「蒜山だいこん」を育てる農家です。いつも、お父さんやお母さんの大根作りの手つだいをしています。今日の夕食にも大根の料理りょうりがあります。

「大根、あまくておいしいねえ、おじいちゃん。」

蒜山の人はみんな大根がすきだよね。この大根、蒜山で、どうして作るようになったの。」

おじいちゃんは、「蒜山だいこん」について、ゆっくり話し始めました。

せんそうが終わって間もなくのことじゃ。国は、蒜山を切り開くために全国から「入植者」にゅうしよくしやを募集ぼして、百人いじよう以上の人が集まったんじゃない。たくさん的人是集まったものの、それまで農業をしたことの



蒜山だいこん J Aまにわ提供





ない人も多かった。その上、もともと蒜山^{ひるぜん}地方は「黒ぼこ」とよばれる火山灰土^{かざんばいど}だったので、土に養分^{ようぶん}もなく、作物がなかなか育たない土地だったんじゃ。そのために日々のくらしにこまり、蒜山を出て行く人が後をたたなかったんじゃ。

「蒜山の人々が食べていけるように、何かないだろうか。」

蒜山の美しい山々を見ながら、農業を指導していた谷本さんは考えた。谷本さんも、もともとは蒜山にやってきた入植者^{にゅうしよくしゃ}の一人だったんじゃ。

「わたしは、この土地が大すきだ。この蒜山のよさを生かした作物があるはずだ。」

谷本さんは、入植した人たちと協力^{きょうり}して、実験^{けん}をくりかえしているうちに、「みの早生^{わせ}だいこん」というしゅるいの大根に出会った。大根は、もともと秋から冬にかけてとれる野菜^{さい}じゃが、蒜山の夏のすずしさを生かして、大根を作ることを思いついたんじゃ。



しかし、はじめは蒜山ひるぜんの「黒ぼこ」のために、芽めすら出なかった。そこで、ひりようを入れたり、草をうめこんだりして、野菜さいが育つ土にかえていったんじゃ。

そして、何年かすぎたころのことじゃ。

「芽が出たぞ。」

谷本さんは、「黒ぼこ」から出た小さな小さな大根の芽をみんなと見つめたそうじゃ。土に養分ようぶんができると、火山灰土かざんばいどは土のつぶが小さいので、ほかの土にくらべて野菜の根は

どんどん太く大きく育つ。大根は、根を食べるのだから、蒜山ほどよい土地はなかったんじゃ。

「蒜山だから、蒜山のこの土地だからできた大根だ。」

そして、数年をかけて、蒜山の人々に夏の太根のさいばいが広まり、さらに十年後の昭和三十六年（一九六一年）「蒜山だいこん」という名前で、日本全国に出荷しゅっかされ



ることになったんじゃ。

今では、「ひるぜん蒜山だいこん」は、ジャージー牛とともに蒜山を代表する特産物とくさんぶつの一つになった。そして、休みの日には、けんがい県外からもたくさんの方が「蒜山だいこん」をもとめてやってくるようになったんじゃ。蒜山の人々は、「蒜山だいこん」が多くの人たちに知れわたり、愛されるようにと、今でもさまざまなくふうを重ねているんじゃぞ。

たかしは、おじいさんの話を聞いて、いつも食べていた「蒜山だいこん」が、今日はいつもよりずっとおいしいと思いました。そして、「蒜山だいこん」のよさをもっと多くの人に知ってもらいたいと思いました。

今年ももうすぐたくさんの方がさんかする蒜山のマラソン大会が開かれます。たかしは、そこでみんなと「蒜山だいこん」のことを話すのが楽しみになりました。

※蒜山マラソン大会では、毎年、さんか者に「蒜山だいこん」が配られています。

受けつがれる心

— 岡崎嘉平太 —

おかざき かい た

社会科の学習で、わたしが住んでいる吉備中央町の「大和山」に登ることになりました。大和山はわたしたちの町のシンボルとなっている山なのですが、一度も登ったことはありませんでした。頂上につきました。まわりを見回してみると岡崎嘉平太さんの「石碑」がありました。

「岡崎嘉平太さんは、となりどうしの国である日本と中国が、もっとなかよくなるように人生をかけてつくした人ですよ。」と、案内の方が教えてくださいました。

（岡崎嘉平太さん、どんな人だったのだろう。）

わたしは嘉平太さんのことをもっと知りたくなりました。



岡崎嘉平太
(公財)岡山県郷土文化財団所蔵



望郷の碑
(公財)岡山県郷土文化財団所蔵



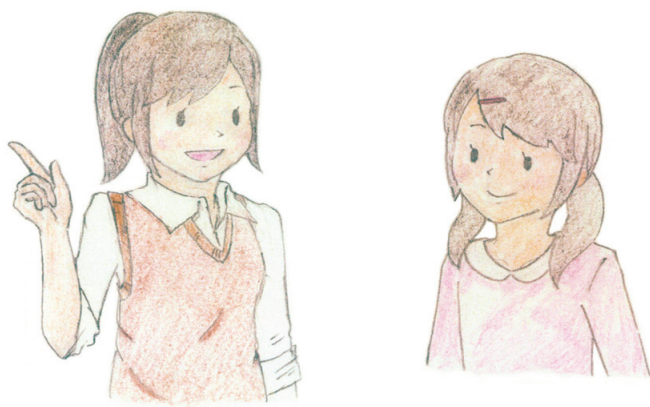
家に帰って、今日の学習で見聞きしたことを中学生の姉に聞いてみました。

「お姉ちゃん、岡崎嘉平太さん^{おかざき かねいた}って、どんな人だったの。」

姉は、話し始めました。

「岡崎嘉平太さんはね、この町で生まれたの。岡崎さんが生まれた時代は、日本と中国はあまり交流をしていなかったの。でもね、子どもころ中国から来た留学生^{りゅうがくせい}となかよくなって、中国のことをたくさん教えてもらったの。そして、その後、交流がなくなったことを悲しく思い、歴史的^{れきししてき}に深いつながりのある中国と、たがいにもっと助け合える関係^{かんけい}を作りたいというゆめをもつようになったの。そのゆめの実現^{げん}のために生涯^{がい}をかけてがんばった人なのよ。なくなるまでに、なんと百回も中国をおとずれたそうよ。」

「子どもころから、中国の人となかよくしていたんだ。百回も中国に行くなんてすごいなあ。でも、どうしてそんなに何回も中国に行ったの。」



「それはね、中国の人ともっとなかよくなるには、実際に中国に行って人々のくらしを知り、まごころをもって、せつすることが大切だと考えたからなのよ。そんな岡崎さんの人がらのおかげで、なんと、当時の中国の首相ともなかよくなったそうよ。」

「岡崎さんて、すごい人なんだなあ。」

「今、吉備中央町と中国の町の中学生が毎年のように交流をしているのは、岡崎さんの気持ちをわたしたちの町の人や中国の方々を引きついでいるからなのよ。」

そう話す姉の顔はとても、ほこらしく見えました。わたしは姉の話を聞きながら、去年、中国からホームステイにやってきた少し年上の陳さんとのことを思い出していました。

陳さんと出会うまでのわたしは、他の国の人とほとんど話をしたことがありませんでした。そのため、陳さんに会ったさいしょのころは、とてもきんちようしていました。でも、勇気を出して話しかけてみたら、陳さんは一生けんめい話を聞いてくれました。言葉でうまくつたえられないときには、身ぶりや手ぶりでつたえるようにしました。すると、少しずつ思いが通じるようになってきました。本当にうれしかったです。

陳^{ちん}さんはわたしにいろいろなことを教えてくれました。おどろいたことに、「感謝^{かんしゃ}」という字は日本と同じように、「相手の人にありがたいと思う気持ち」という意味になるそうです。同じ漢字を使っているだけでなく、意味まで同じだったことに、わたしはとても感動しました。

陳^{ちん}さんとの生活を思い出したわたしは、言葉や文化がちがっても、分かり合おうとすることの大切さをあらためて感じる事ができました。

わたしは今年、四年生になりました。陳^{ちん}さんとは今でも、ときどき手紙をやりとりしながら、交流をつづけています。今年もわたしの町には、中国をはじめいろいろな国からたくさんの方がこられます。他の国の言葉を勉強して、身ぶりや手ぶりを交^{まじ}えながら、たくさんの人となかよくなりたいなと思っています。



日本女子スポーツの夜明け ―人見絹枝―

ひとみきぬえ

「やった！きつとみんなも、よろこんでくれるにちがいない。」

十六才の絹枝は、岡山県女子体育大会の走りはばとびで、四メートル六十七センチメートルという当時の日本最高記録を出し優勝しました。

しかし、喜んだのもつかの間でした。

「あんなに走ってどうするんだ。」

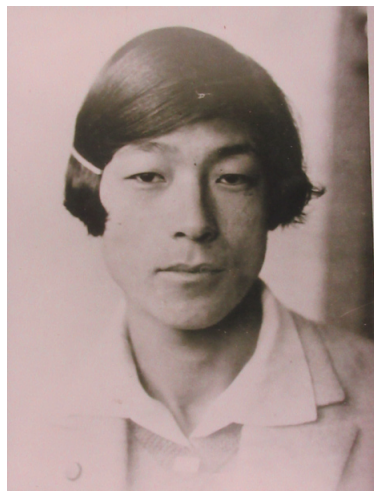
「女性^{じよせい}が人前で足を出して走るなんて、とんでもない。」

こんなかけ口を言う人が多くいたのです。女性はあるべきだという考えの強い時代でした。

（だれからも文句^{もんく}を言われず、女性が堂々とスポーツをできるようになればいいのに。きつと、そう願っている女性が私のほかにもいるはず。）

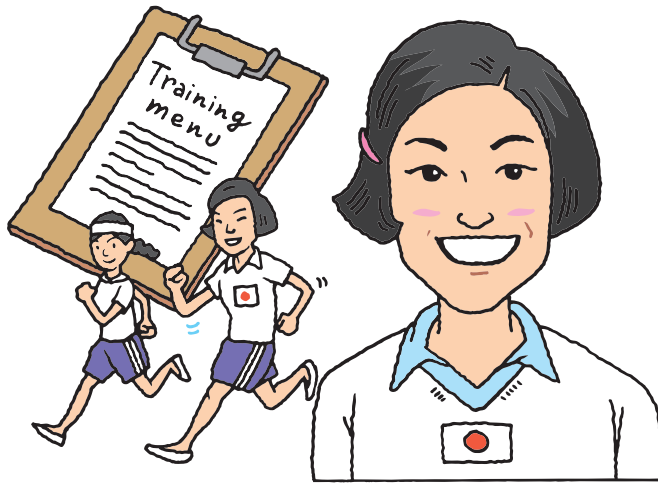
絹枝はそう思いながら、黙々^{もくもく}と練習を続けていました。

その後、絹枝は二階堂^{にかいどう}体操塾^{たいそうじゆく}（今の日本女子体育大学）に入学しました。そして、国内の大会に出場し、次々と当時の世界記録を更新^{こうしん}して、世間^{せけん}から注目されるようになったのです。



人見絹枝 岡山市立福浜小学校提供

十九才で大阪毎日新聞社に入社した絹枝は、記者としていそがしく働きました。「日本の女子スポーツを少しでもさかんにする。だれもがのびのびとスポーツを楽しめるようにする。」という夢に向かい、仕事が終わると一人グラウンドで黙々と走るのです。絹枝は今まで以上に練習にはげみました。



ヨーテボリでの国際女子競技大会に、絹枝は日本人としてただ一人出場しました。走りはばとびで五メートル五十センチメートルの世界記録を出し、立ちはばとびでも二メートル四十七センチメートルの記録を出して優勝しました。

そのとき、絹枝は大切なことに気付きました。

（世界の女子選手は、一年を通じてトレーニングを考え組み立てている。トレーニングの大切さを日本の女子選手に知らせたい。そうすれば、競技力がもっと向上して活躍する人がふえるはずだ。）

絹枝は、夢に向かって心をおどらせました。

それから、絹枝は仲間といっしょにますます練習にはげみ女子スポーツの発展のためにがんばりました。また、この海外遠征での経験や見たり聞いたりしたことを記事に書き、世界の女子スポーツの様子を日本の人々に紹介しました。日本の女子

スポーツ選手が強くなるために、絹枝は、動き始めたのです。

ところが、絹枝の思いとはうらはらに、日本国内での女子スポーツへの風当たりは強いままでした。岡山の実家にも、心ない手紙が送りつけられました。これまでの絹枝の努力が、がらりと音を立ててくずれていくような内容でした。

（どうして、どうして、分かってもらえないのか…。）

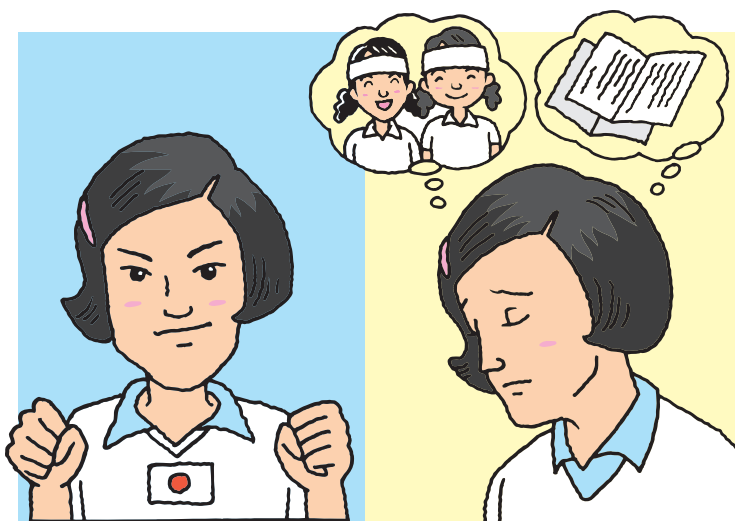
にぎりしめたこぶしに、力が入ります。

絹枝の心に、これまでの日々がよみがえってきました。夢を実現させるため、つらい練習にたえ、いっしょに汗を流した仲間の笑顔。記録が少しでものびると、かたをだき合い自分のことのように喜び合った仲間の歓声。自分や仲間の遠征費用を集めるためにいろいろな人に頭を下げて回ったこと…。

（これまでしてきたことは、一体何のためだったのか。すべてがむだなことだったのだろうか。）

どれくらい時間が経ったでしょう。固く結んだ絹枝の口が、ゆっくりと開きました。

「夢を実現するために、どんなことを言われても私はくじけない。」



その後、二十一才になった絹枝はアムステルダムオリンピックに、日本の女性として初めて出場しました。苦しい試合でした。金メダルは確実とだれもが信じてうたがわなかった百メートルで敗れてしまったのです。しかし、八百メートルに出場し、日本の女子スポーツ選手初のオリンピック銀メダリストとなりました。

二年後、プラハで行われた世界女子オリンピック大会で、絹枝は団長・コーチ・選手としてのぞみました。国旗をかがけ入場する絹枝の後ろには、五人の若い日本女子選手が続いていました。絹枝の顔は晴れ晴れとかがやいていました。おねをはり、前をしっかりと見つめ、一步一步ふみしめながら歩く絹枝のすがたがそこにはありました。絹枝の思いえがいていた夢が、少しずつ現実のすがたとしてあらわれるようになってきたのです。

しかし、その一年後、絹枝は二十四才というわかさでなくなります。

けれども、絹枝の夢は、日本の女子選手たちに引きつがれていきました。一九九二年のバルセロナオリンピックでは、絹枝以来、女子の陸上競技において岡山県出身の有森裕子選手が銀メダルを獲得しました。水泳、バレエ、サッカー、様々なスポーツにおいて、数多くの日本女子選手が、活躍できる時代がやってきたのです。

村の人々のために ―山田方谷―

やまだほうこく

臥牛山の頂に建つ備中松山城。そのふもとを清らかに流れる高梁川。江戸時代の終わりごろ、この地に、山田方谷という人がいました。

山田方谷は、一八〇五年、備中松山藩西方村（現在の高梁市中井町西方）の農家で生まれまし
た。このころの農民は、朝から晩まで働きつめの生活を送っていました。子どもたちも朝から晩
まで手伝いをするのが当たり前でした。しかし、方谷の両親は方谷におさないころから教育を受
けさせました。方谷は新見藩にある塾に入門して学問にはげみました。

時は流れ、大人になった方谷は、備中松山藩の藩主・板倉勝静の
教育係として働くようになりました。

藩にくらす人々のために立派な藩主となるよう、方谷はそれま
で自分が学んできたことを勝静に一生懸命教えました。

方谷の人柄を見こんだ勝静は、火の車だった藩の財政を立て直
す大切な役目を方谷にまかせようと考えました。ところが、方谷
は、

「わたしは武士ではなく、ただの学者ですから。」
と、勝静の申し出をことわり続けました。



山田方谷像 高梁方谷会蔵



「武士でない山田方谷に、藩の大切な役目をまかせるのは反対だ。」

「武士がやってよくならんことを、農家の出の学者がどうにかできるわけがない。」

ほとんどの武士が、方谷のことをこころよく思っではいませんでした。

（こんな中で私が改革をやったとしても、ついて来てくれる者はだれもいないだろう。うまくいくはずがない…。）

そんな思いが方谷のおねの中に生まれていました。道がこわれても修理はされず、田畑もあれていきました。やがて藩の財政はますますきびしくなり、方谷は勝静に再びよばれました。

「今こそ、そなたの学問をこの備中松山藩のために生かすときが来たのだ。力を貸してくれぬか。」
真っ直ぐに方谷を見つめる勝静の目は本気でした。

勝静に何度もたのみこまれ、そのたびにだまっとうつむく方谷のまぶたのうらには、父母、村の人々の苦しい生活の様子がまざまざとよみがえってくるのでした。

「これでは、何にも収穫ができません。」

「けれど、年貢の取り立ては毎年やってくる。」

「用水路さえ元通りに直れば、何とかなるのだが。」

村の人たちのことを思うと、方谷のおねははりさけそうになるのです。

（私が今まで、学問をしてきたのは、一体何のためだったのか。自分の満足のためか…。いや、



備中松山城（高梁市）



ちがう。村の人々の幸せなくらしを実現するためではなかったのか。たとえだれも私の後について来てくれないとしても、村の人々のため、このままにいるわけにはいかない…。」

方谷は、藩の人々のために自分が率先して改革を行うことを決意したのでした。

それからの方谷は、周りの武士たちの反発にも負けず、改革をどんどん進めていきました。大坂にある藩の蔵屋敷を廃止しました。そのおかげで、蔵屋敷にかかるお金が節約できました。

ある日、村の老いた農民が言いました。

「固い土をくわで耕すのは大変じゃ。」

その話を聞いた方谷は、これまでのくわに改良を加えて「備中ぐわ」をつくり出しました。その後、この「備中ぐわ」は日本全国で使われるようになりました。このくわは村の人々に、仕事のしやすさを生み出しました。また武士の家の庭に植えていた柚子を使ったお菓子「ゆべし」は備中松山藩の名物になり、藩内でさかんに作られました。そして、これらの生産物を江戸に売りに行くための道の整備も行いました。こうして、少しずつ村の人々の生活は豊かになっていったのです。

さらに、方谷は年貢米を納める「郷倉」を設けました。長雨などで米のできがひどく悪いとき

には郷倉ごうぐらを開き、村の人々に米を分けあたえました。そのおかげで、備中松山藩びっちゅうまつやまはんではただの一人も餓死者がししやを出さことなく、人々はみな安心して生活することができたのです。

「郷倉のおかげじゃ。方谷様ほうこくは神様のようじゃ。」

備中松山藩の人たちは、口々にそう言って畑仕事に精せいを出しました。

農民たちが笑顔で働くその様子を、方谷はじっと見つめていました。

※大坂…現在の大坂

※郷倉…藩内はんうちの要地ようち四十力所ほどを選んで建てられ、凶作時きようさくじの備蓄用びあくようとしても使われた。民心安定みんしんあんていを図る取組である。



高梁市巨瀬町に残る郷倉

文化の発展のために ——大原孫三郎——

おおはらまごさぶろう

岡山県倉敷市は、白壁が美しい文化の香り高い街です。その代表的な存在となっているのは、年中、大勢の人がおとずれ、今では、世界中の人々から愛されている大原美術館です。

この大原美術館をつくった大原孫三郎は、明治十三年七月、今の倉敷市で生まれました。孫三郎の家は、当時、県内いたるところに田地をもつ大地主であり、また、紡績会社を経営している資産家でした。

孫三郎は二十三才になった年の五月二十三日の日記に、「わたしの財産は、天から貸しあたえられたものであり、これを人々のために使うのが自分の天職である。」と書いていますが、自分が受けついだ財産を世の中のために利用すべきだ、という信念を一生つらぬいたのです。

大正十年三月、倉敷市の小学校の校舎で、洋画の名画展が開かれました。郷土の画家、児島虎次郎がヨーロッパから持ち帰った、二十五枚の絵が展示されたのです。孫三郎は、遠く東京や九州からも、多くの人々が集まって来るのを見ておどろきました。絵を見ている人々が、目をかがやかせてくいい入るようにつめ、いつまでもその場を動こうとしないのには、もっとおどろきました。孫三郎自身も、見ているうちに洋画の魅力にとりつかれ、絵に引きつけられてしまいました。



大原孫三郎 大原美術館提供



（このようにすばらしい洋画を、日本ではほとんど見る事ができないとはいかにも残念なことだ……。ようし、わたしが、日本で最初の洋画の美術館をつくろう。）

と、孫三郎は決心しました。さっそく、虎次郎に自宅へ来てもらいました。

「虎次郎さん、西洋の名画を集めることはできないでしょうか。」

「わたしも、前々から望んでいたことです。しかし、名画を集めるとなると、莫大なお金がかかります。」

「費用はわたしにまかせてください。いくら高くてもいいからあなたの力で、良い絵を買い集めてもらえないでしょうか。」

虎次郎は思いがけない言葉に、しばらく声も出ませんでした。

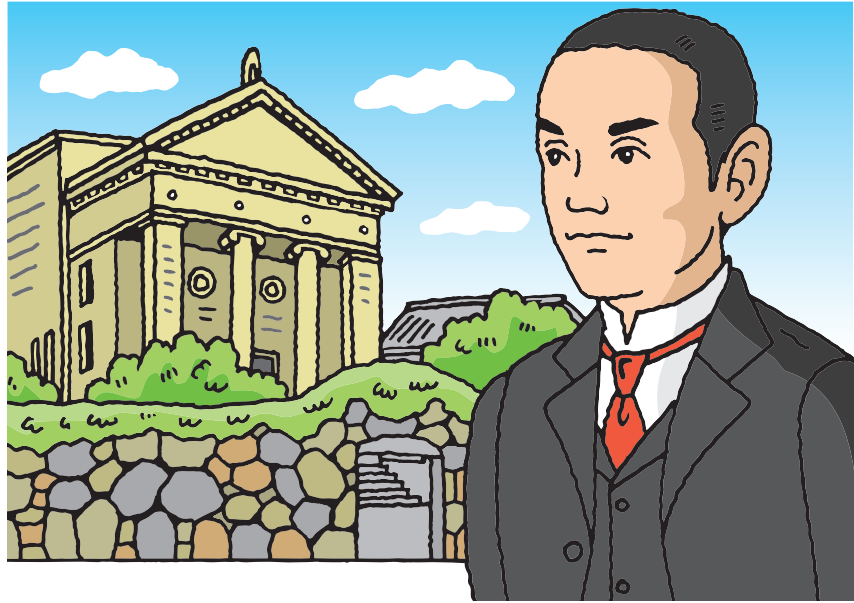
「できるかぎり力をつくして、名画を集めましょう。」

足どりも軽く立ち去る虎次郎の後ろすがたを見送ってから、孫三郎は、

（ヨーロッパに行って直接名画を見て勉強するということは、簡単にはできることではない。最高の名画を集めて、いつでも、だれでも見られるように美術館をつくっておけば、自然と国民の教育に役立つだろう。そして、倉敷を文化の中心地にしたい。）

と考えながら、開け放された障子の間から見える外の景色をながめていました。春の陽光があふれるように庭の木々にふりそそいでいました。

名画が、一枚、一枚、買い集められ、グレコ、ミレー、セザンヌなどの絵もとどきました。そのたびに孫三郎の財産は、どんどん、少なくなっていきました。孫三郎は着物一枚買うのも、大好きな肉を食べるのがまんして、おどろくほど質素な暮らしをしました。



しかし、世間の人々の中には、悪口を言う人も少なくありませんでした。

「大原のだんなさんは、とてつもない大金を出して、西洋の絵を集めているような。金持ちの道楽じゃよ。」

「どぶにお金をすてるようなものだ。絵なんか買わないで、もっと役立つことに使えばいいのに。」

こんなかげ口が、絶えず孫三郎の耳にも入ってくるのでした。ときには、孫三郎の心も動揺することがありましたが、昭和五年十一月五日、ついに、念願の美術館が建てられました。

しかし、開館当時は、一日に平均二人か三人が来るだけでした。天候の悪い日などは、入館者が一人もいない、という日さえあったのです。

ひっそりとした美術館の入口には、ロダンの彫刻「カレーの市民」が、きっと口を結び、強い決意をおねにひめて、歩み出そうとするかのように、雄々しく立っていました。

孫三郎は、その前にひとりたたずんでいろいろと考えたものでしたが、人々のために役立ちたいと思う心と、文化の向上は人々のくらしをゆたかにするという信念は少しも変わらず、引き続いて多くの名画を集めました。

そうして、今日の^{こんにち}ような「世界の^{よこ}たから」といわれる美術館^{びじゅつかん}になったのです。

孫三郎^{まごさぶろう}は大原美術館のほかに、大原農業研究所、大原社会問題研究所^{くらしきょうどう}、倉敷労働科学研究所^{ぐらうせんがく}など、数多くの業績^{ぎようせき}を残して、昭和十八年一月、六十四才で、多くの人におしまれながらなくなりました。財産^{ざいさん}として残っているものはほとんどなく、その大部分が社会事業に使われていました。

※児島虎次郎^{こじまとらじろう}：岡山県高梁市出身の画家。孫三郎とは生涯^{しょうがい}親交^{しんこう}をもち、大原美術館の建設^{けんせつ}に大きく貢献^{こうけん}した。



大原美術館 提供

かがみじし
鏡獅子 — 平櫛田中 —
ひらぐしでんちゅう

六代目尾上菊五郎おのえきくごろうのふんする鏡獅子が、花道から出て来たとき、平櫛田中ひらぐしでんちゅうは思わず息を止め、ひざを乗り出しました。かっと見開いた目、きりっとひきしまった口、どっしとふみしめた足、かみの毛一本一本にまで、力強さがみなぎっています。

「これだ！」

田中でんちゅうが木彫もくちょうの世界に求め続けた理想が、鏡獅子の中に生きているのです。

「この力強さをなんとか木彫で表現してみたい。自分の作品の総仕上げとして、天心先生のおっしゃる伝統木彫でんどう（日本に昔から伝わっている木彫）の美を表現してみたい。」と思いました。このとき、すでに、田中でんちゅうは六十四才でした。

菊五郎の鏡獅子を作ろうと決心した田中でんちゅうは、毎日、歌舞伎座かぶきざに通い出しました。

「首の曲げ具合、手の開き加減、足の位置……。どんなすがたがいいだろう。」

前後左右、いろいろな角度から舞台ぶたいすがたを観察しているうちに、公演の二十五日間、ついに、一日も休まずに歌舞伎座に通っていました。

公演が終わってから、菊五郎にお願いして、何回もモデルになってもらいました。そして、



「試作鏡獅子」（昭和14年作）
井原市立田中美術館蔵



最後に決めたのが菊五郎きくごろうが花道から舞台ぶたいに出てきて、そこで口をしぼり、とんとふんばって決めた、最もひきしまったすがたでした。

「着物がたを正確にするために、まず、はだかの像を作ってみよう。」

と考えました。ふつう、着物を着た像をほる場合、下の肉体を作れば、着物はそれにうまくのつてくるものです。ところが、鏡獅子かがみじしの場合は、着物が体に比べて、ずっと大きく作られています。さらに、もう一つやっかいなことに、頭に大きな毛をかぶっています。大きな着物もどうにか体に合わせておさめると、頭の毛が貧弱ひんじやくに見えてくるし、頭の毛に力を入れると、今度は着物の方が負けてしまうのです。頭だけの像を作ったり、小さい像を作ったりしながら研究を重ねました。「どうすれば、あの力強さ、ひきしまった感じが出せるのだろうか…。」

田中でんちゆうは、何度もみを持つ手の動きを止めました。上体をそらし、目を細め、息をつめては像をながめました。

こうしていく日ともなく過ぎて、いつしか二年の歲月さいげつが流れていました。すばらしい鏡獅子ができることを期待して、お金の援助えんじょをしてきた人は、いつ完成するとも知れない様子にしばれをきらしてしまい、ついに、

「田中さんでんちゆう、わたしは、これ以上お金を出すわけにはいきません。あとは、ご自分の力でやってみよう。」

と、冷たく援助を打ち切ってしまったのでした。援助のなくなった生活は苦しいものでした。その上、物価は高くなる一方で、生活はますます苦しくなっていました。さらに、第二次世界大戦も始まりました。

小さい鏡獅子^{かがみじし}を作って研究を続けながら、ときには、それを売って資金にあてていきました。八十三才のとき、健康を害しました。

「田中先生もお年だから、鏡獅子の大作^{たいさく}はご無理のようですね。」

「もういい加減にあきらめて、お金になる作品をお作りになればよいのに。」

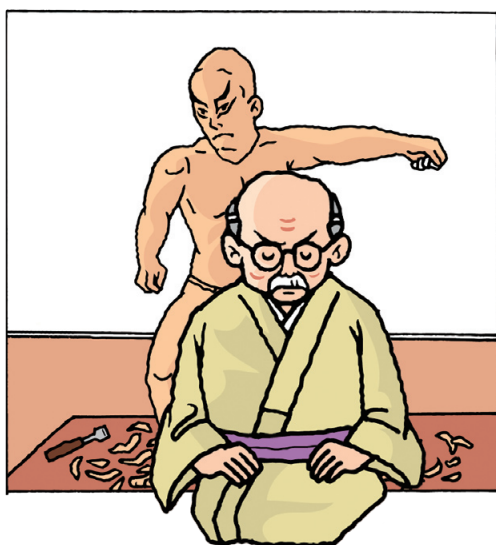
こんなかげ口を言う者も少なくありませんでした。

田中^{でんちゅう}は、やせ細った体で、はうようにして仕事場に入っていました。がらんとした人^{ひと}気のない仕事部屋には、制作中の鏡獅子が木くずの中に立っています。田中^{でんちゅう}は、その前に静かに正座^{せいざ}して目を閉じました。身動きもしないで考えにふけていました。どのくらいの時間が過ぎたのでしょうか。いつの間にか、戸のすき間から朝の光がふりそそぎ、鏡獅子がまぶしいくらいかがやいていました。再び開いた田中^{でんちゅう}の目には、新しい精気^{せいき}がみなぎっていました。

（よし、新しくやり直そう。）

ほねばった手にぐっとのみをにぎりしめると、力強くほっていきました。

二度、三度の失敗にもくじけず、大きい原型から作り直してほっているうちに、しだいに、ひきしまった力強さが出てきました。全身に血が通い、心臓^{しんぞう}の音さえ聞こえてくるようでした。



田中でんちゅうの命がこめられていました。鏡獅子かがみじしに取り組んで二十年。ニメートル三十センチにもおよぶ大像は、見事に完成したのです。

田中でんちゅうは大きく目を見開いたまま、ただ鏡獅子を見つめていました。

「天心先生てんしん、やっと、わたしなりに満足のいく像として『鏡獅子』をほり上げることができました。長年の夢がようやく実現できました。伝統木彫でんどうもくちようの美の世界がうまくとらえられているでしょう。先生、見てください。」

今はなき、岡倉天心おかくらてんしんに完成の喜びを報告する八十六才の田中でんちゅうの目に、なみだがあふれていました。

完成するまでの二十年間、何度もかべにぶち当たり、何度かあせりに身をすりへらしたのです。そのたびに、田中でんちゅうの心を強く支えたものは、

『いまやらねばいつできる、わしがやらねばだれがやる。』
という心の声でした。

念願の鏡獅子を完成させた後も、とどまることなく理想を求め続けた田中でんちゅうは、多くの作品を残して、昭和五十四年十二月三十日、百七才の生涯しやうがいを閉じたのです。

※岡倉天心…田中でんちゅうが生涯しやうがいの師とあおいだ美術家。

しずたに

閑谷学校への願い ― 津田永忠 ―

つ だ な が た だ

「わたしの役目は、岡山藩^{はん}の人々の生活を豊かにすることにある。そのためには、人々が身分を問わず、学問にはげむことが必要なのだ。しかし、武士のための学校はあるが、庶民^{しよみん}のための学校はない。何とかして、学問の場をあたえてやりたいものだ。」

学問好きで、教育にも深い考えをもっていた岡山藩主・池田光政^{いけだみつまさ}は、学校奉行^{ぶぎょう}の津田永忠に、このような思いを熱心に語りました。

「永忠、わたしの願いが後世^{こうせい}に続くような、永久に残る庶民の学校を、閑谷につくってはくれまいか。」

永忠は、光政の言葉を重く受け止め、「永久に残る学問の殿堂^{でんどう}」をどのようにすれば建設できるのか、あれこれと思いめぐらしました。

(何よりもまず、数百年、雨や風にたえうる講堂をつくらねばなるまい。そのためには、材木は虫のつかないクスノキを使用する。屋根は雨もりを防ぐために、三重構造にして、備前焼のかわらにする。床^{ゆか}は高くして、くさらないようにうるしをぬる。くぎはさびるので、いっさい使



津田永忠像 岡山市中区 沖田神社



わないようにしよう。」

しかし、永忠ながただが思いえがいた、じょうぶでりっぱな講堂を建てるためには、巨額きやうがくな費用が必要です。家臣の中には、

「農民が学問をして何の役に立つのか。」

「藩はんの財政がきびしいときに、さらに新しい学校を建てるなど、殿とのは何をお考えなのだ。」

と、反対する声も多くありました。

永忠の心は、ゆらぎましたが、

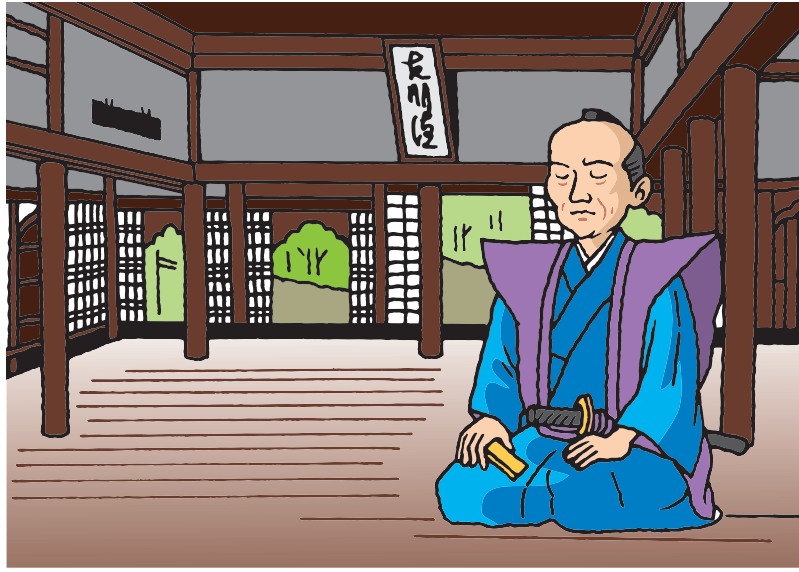
「これからの時代は、庶民しよみんも学問をすることが必要になってくる。」

と、強く自分に言い聞かせて、一六七〇年、閑谷しずたに学校の建設を始めました。

二年後、光政みつまさは、息子の綱政つなまさに藩主はんしゆの座をゆずりました。そのころ、岡山藩は、大雨や洪水こうずいの影響えいきやうで不作が続つき、大飢饉ききんにみまわれていました。永忠は、藩内各地にある学校を一時閉校へいこうにし、学校の運営費用を使って、うえた人々を助けるように提案しました。とこ



閑谷学校 備前市



ろが、飢饉ききんを乗りこえた後も、多くの学校は再開されませんでした。

このようなときに、閑谷学校しずたにの存続そんぞくを強く願っていた先代の光政みつまさがなくなったのです。

「このままでは、閑谷学校も廃校はいこうになることは火を見るより明らかだ。これから先、どのようにすれば、閑谷学校を守り通すことができるのであろうか。」

ねおれない夜が続きました。永忠ながただは、講堂に正座せいざをして静かに目を閉じとしました。谷川のせせらぎが、あのころと同じように聞こえてきます。

『庶民しよみんに広く学問の場をあたえ、岡山藩はんの人々の生活を豊かにしたい。』

と、熱く語る光政のすがたが、あざやかによみがえってきます。月の光がうるしぬりの床ゆかに反射はんしゃして、永忠をやわらかく照らしています。

「そうだ。わたしがここでくじけてはいけない。先代の願いをかなえるためにも、そして何より、岡山藩の人々の生活を豊かにするためにも、閑谷学校を完成させなくては。」

改めて強く決心した永忠は、綱政に願い出ました。

「閑谷学校は、庶民の教育の場としてぜひ必要なのです。皆が学問にはげむことこそ、岡山藩が栄えることにつながるのです。どうかお力をお貸しください。私も生涯をかけて、この学校のためにつくします。」

永忠の必死なすがたに、綱政もついに心を動かされたのです。

永忠は、長い年月をかけて手続きや改築を進めました。藩の財政に左右されないように、学校独自の運営費用として約二百八十石を使えるようにしました。茅葺きだった屋根をじょうぶな備前焼のかわらにかえ、敷地の周りにも石堀や門を築きました。そして、一七〇一年、全ての建設を終えることができました。着工から実に三十二年もの年月が過ぎていました。

「殿、ごらんください。庶民のための学問の殿堂が、ようやく完成をいたしました。殿の願いは、ここで学ぶ人々によって、永久に受けつがれていくことでしょう。」

光政の墓前で手を合わせ、完成の喜びを告げる永忠の目には、なみだが光っていました。

この閑谷学校で学んだ多くの人々が、岡山の発展のためにつくしたのです。

しゅとう
種痘で人々の命を — 緒方洪庵 —
おがたこうあん

「お、お母ちゃん。いて、いてえよう。」

たえきれない苦しさにもがきながら、弱々しく動かしている男の子の手足に、そして、高い熱のために赤らんだ顔やのどにも、先の赤いつぶつぶがはっきり見られます。

「これは、まちがいなく天然痘だ。このままでは死んでしまう。何とか助けることができたとしても、できもののあとが顔一面に残るだろう。種痘の種がほしい。種さえあればなあ。」

大阪で町の人々を治療していた緒方洪庵先生の顔色は、厳しくもっていました。

今までにも、天然痘で苦しむ人を何度も見ながら、どうすることもできなかった洪庵先生は、イギリスやオランダで天然痘の治療に使われている種痘の種が、ほしくてたまりませんでした。種痘の種さえあれば、このいたましい病気から、大勢の人々を救うことができます。



緒方洪庵像 岡山市北区足守



しばらくして、その種痘しゅとうの種が、日本にも伝えられました。オランダの人が長崎に持ってきたその種が、京都きょうとの笠原白翁かさらはくおうという先生の所へ届とどいたのです。

このことを伝え聞いた洪庵先生こうあんは、ぜひその種をゆずり受け、町の人々を助けたいと考え、大急ぎで大阪おおさかから白翁先生をたずねました。

「わたしは、天然痘てんねんとうにかかって死んだり、顔一面にできもののあとが残ったりするかもしれない大勢の人を救いたいです。白翁先生、どうかお願いします。種を少し分けてください。」と、たたみに額をこすり付けるようにしてたのみました。

洪庵先生の、広く人々の命を思う心と熱心さに動かされた白翁先生は、種痘の種を分けてくれたのでした。洪庵先生はあまりのうれしさになみだを流して、白翁先生の手をしっかりとにぎりしめました。

やっと手に入れた種痘の種です。洪庵先生は、弟子でしといっしょに、町の人々にこの種を使って種痘を広めようと思いました。ところがこまったことに、種痘を受けてくれる人がいないのです。人々は、種痘が安全で、天然痘の予防にとってもよいことを知りませんでした。種痘をしたら、かえって天然痘になるのだという、あやまった考えを信じていたのです。

（どうしたら人々に種痘を信じてもらえるのだろうか…。）

洪庵先生の心の中には、顔一面に広がったむらさき色のできものから、血の混じったうみを流しながら死んでいった人々の苦しみがやきついていましたのです。

（種痘の種が手に入ったのだ。もう、あのような病人を出してはならない。いちばん大切な人間の命を守らなければ…。）



洪庵先生は、雨の日も風の日も町に出かけ、人々に話したり、種痘の大切さを書いた紙を配ったりしました。

こうした苦労が三年も続いて、やっと町の人々は、洪庵先生の言うことを信じるようになりました。種痘を受けるためにたずねてくる人々が、一日一日と増えるようになってきたのです。

このことは、洪庵先生の生まれ育った足守藩（現在の岡山市北区足守）にも伝わりました。さっそく足守によびよせられた洪庵先生は「除痘館」という所で、足守や近くの村々の、およそ五千人もの人々に種痘をしました。

また、先生は、そんなにそがしい間にも、町の人々の病気を診察し、貧しくてお金をはらえない人も、分けへだてなく治療しました。さらに、医学を志す後はいのために、ドイツの医師が書いた『医者的心得』を翻訳し、どんな患者に対しても、平等に接することの大切さを伝えました。

洪庵^{こうあん}先生の願いは、日本中に種痘^{しゅとう}を広め、天然痘^{てんねんとう}から人々の命を守ることでした。その願いは、先生の死後、二十年ほどで見事になえられ、今では、天然痘のおそろしささえ、知られなくなつたのです。

※天然痘…皮膚^{ひふ}にうみがたまつたできものができ、高熱が出る病気。今は予防ができる。

※種痘…天然痘を防ぐために、行われた予防接種のこと。当時は皮膚に傷^{きず}をつけ、そこに種痘の種を付ける方法が行われていた。